
間奏曲?

白亜迺舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間奏曲？

【Nコード】

N9561I

【作者名】

白亜迹舞

【あらすじ】

変奏曲第二弾。今度はefです。今回はちょっと長めですし蓮治と千尋、それと優子が好きな方なら楽しめるかなー、といった内容になっています(?)。初音ミクはなしです。

「——ッッ！」

針でつつかれたように彼女——千尋の意識は戻った。

「あ、起きたね。寒くない？」

隣に座っていた蓮治がのんきそうに話しかけてきた。

教会だった。蝋燭の幽かな明かりがあり、夏の夜の冷めた空気が静かに満ちていた。

「——わたしどのくらい眠っていましたっ？」

千尋は早口で問うた。なぜなら、

「ぴったり一時間だね。大丈夫、千尋の記憶が消えないうちに起こすつもりだったから」

千尋は十三時間しか記憶を保持できないからだった。へたに眠りこけると、すべての記憶を失う可能性がある。

ドキドキ、千尋の心臓は不安に高なっていた。けれども、そばに座る蓮治は穏やかに、千尋の胸の荒波を落ち着かせようとするようにのんびりと話した。

「ここしばらく、千尋はクリスマスを題材に短編を書いてて根を詰めていたからね。ときどき休まないと、本当に倒れちゃうこともあるのに。だからこうしてゆっくりできるように散歩に出てきたんだし、あんまり緊張なくていいんじゃない？　ぼくも原稿を見直したりしていたし。それより千尋が寒くなってるのかのほうが気になるよ」

「——ううん。大丈夫です、蓮治くん」

彼の思惑通り、千尋の不安も心臓も勢いを失ってしまふ。肩に掛けられていたスプリングコートを掴みながらそっと彼の顔を見やると、温かい笑顔で返された。

冷えた空気の滞留する向こうに、白い十字架がそっけなく置いてあった。

「わたし、夢を見ました」

へえ……、と蓮治は応えた。

「良い夢だった？」

「いいえ……あまり、そうは言えません。……女の子が、十字架に架けられて殺される夢でした……」

蓮治の返答はなかった。

そういえば、あれはイエスの受難を模した光景だったと千尋は冷静な頭で思った。

「教会で眠ったからかな？」

蓮治も同じことを思ったようだった。

「でもそれはきつとクリスマスに見る夢じゃなさそうだね。イースターならともかく」

「はい。それに、女の子はわたしの全然知らない子でした」

——見覚えがまったく無いわけではない気もしますけど。

「それはともかく」 蓮治は言いながら立ち上がった。

——「そろそろ行かない？ 時間も遅くなっちゃうし」

外に出ると満天の星々。なかでも一つの星が、超新星のように輝いていた。

「蓮治くん、あれ」

「へえ……、なんだろうね？ ベツレヘムの星みたいだね。千尋もそう思うの？」

「うん。わたしもそう思います」

「ベツレヘムの星はイエス・キリストが産まれた夜に主がお示しになった奇跡。そのようなものが見えるのでしたら……本当に、奇跡としか言いようがありませんね」

——幽かな羽音。

千尋、蓮治ではない第三者。夜闇の中から、夜闇色のコートを身にまとってひっそりと姿を現した。あまり気温は低くないから、彼女のコートは暑そうだった。

「メリークリスマス。聖なる夜にあなた方の幸いを祝して」

黒い帽子を被り、黒い服装に身を包んだ小柄な若い女性。蓮治と千尋は彼女を知っていた。

「あ、あなたは……」

「えっと、お久しぶりですね。……お名前が」

「雨宮優子と申します」

おっとりと頬笑んだ優子。

蓮治と千尋は戸惑いながらも挨拶した。

「雨宮さん。メリークリスマス」

「メ、メリークリスマス」

「メリークリスマス。よい聖夜です。今宵は素晴らしい夢見でしょうね」

そして唐突に、優子は歌いはじめた。

甘い声。見た目とはギャップのあるちょっとあどけない、優しいしなやかな声。少し低く始まり、繰り返しながら徐々に高まり、力強く響く――そんな歌を、優子はたくみに歌いあげた。

歌う技術の高さに、なによりも一心に歌う姿の美しさに、蓮治と千尋は胸を打たれた。天使の歌のように二人には思えた。

『アヴェ・マリア』と、歌うようすは聖母を祝福する天使のようだった。

しかしそのメロディーを蓮治は知らないようだった。千尋も昨日までは知らないはずだったが――

「そ、その歌……」

涼しい夏の夜のまどろむような空気に溶け込むように、その歌はゆったりと響いた。

「どうしてその歌を」

千尋のせつつくような問いかけに、優子はやわらかく息を吸い込みながら答えた。

「ブルックナー作曲のアヴェ・マリア。イエス・キリストが産まれた夜の、お母さんを讃えて歌うにはこれ以上の曲はないと思いますか？」

「アヴェ・マリアってグノーが作詞したものとかが有名じゃありま

せんか？」 蓮治が言った。

「今のは聞いたことのないバージョンでしたけど」

「ふふ、どうしてか、今はこれを歌う気になったのです」

優子は謎めいて笑い、それ以上は言おうとしなかった。

「知ってたの？ 千尋」

蓮治が千尋の方を見た。

千尋は思い返しながら——ついさっき見た、夢の中で美しくも痛々しく響いた歌を幻に聴きながら、蓮治に答えた。

「さっき夢で——」

「つらいことなら思い出さなくていいよ」

言い淀んだ千尋のようすを見た蓮治はすかさず、あっけらかんと言った。

「今日はクリスマス。お祭りなんだから、嫌なことは忘れて楽しくしなくちゃ」

「蓮治くん……」

ゴーン、ゴーン、と鐘が鳴り始めた。——悪夢を破るように。

「あら、もうこんな時間ですか。お二人さん、もうお帰りなさい。

——せめて、屋根のある場所にお入りなさいな、二人っきりになるにしても」

「「——！」」

蓮治がむせかえり、千尋は火のついた顔をうつむかせた。

「ど、どういう意味ですか！ ちゃんと帰りますよ、家に。母や従妹、お客さんも待っているはずですから」

「そうですか。では、良い夜を」

蓮治は千尋の手をとって歩きはじめた。

優子は二人の背を見送り、それから星空を——鐘の音の残響が遠く残る、明星が一つ強く輝く空を見上げた。

「ベツレヘムの星に見守られ、汚れなき女から産まれた御子はしかし受難を経ました。貴女は救いの御子ではない。貴女の生きる道は御子の道ではない。しかし受難はあるでしょう。それでも仮初の貴女は、真実の貴女を産み落とすのですか？

世界に望まれし、音楽の御子。——辛い運命があらうと、奇跡の

夜に、希望を抱いて、貴女は産まれおちるのですか？」

夜空を見上げたまま目を閉じた。

物音ひとつ無い、静かな聖夜。しかし優子は聴こえない音を聴くように身体を揺らし、
そっと、歌いはじめた。今度は別のアヴェ・マリアを。幽かな歌声に力を添えるように。

（後書き）

アニメしか見たことありません。せめてこれを書く前に小説を読みたかったですね。この間奏曲は、初音ミクの間奏曲の方とだいぶ関わりがあると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9561i/>

間奏曲？

2011年3月15日15時34分発行